

論文 / 著書情報

Article / Book Information

題目(和文)	柳宗悦の「無地の美学」
Title(English)	
著者(和文)	佐々風太
Author(English)	Futa Sasa
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12792号, 授与年月日:2024年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:中島 岳志,伊藤 亜紗,北村 匡平,河村 彩,畑中 健二
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12792号, Conferred date:2024/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		佐々風太	
論文審査 審査員		氏 名		職 名		氏 名	職 名
	主査	中島岳志		教授	審査員	畑中健二	助教
	審査員	伊藤亜紗		教授			
		北村匡平		准教授			
		河村彩		准教授			

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論文は、柳宗悦の思想において、「無地」という造形はいかなるものであり、どのような意味をもっていたのか、主に文献調査に基づき本稿では整理・考察している。本稿では、柳の言説を時代ごとにたどり、柳が無地と位置付けた造形を整理し、それぞれの時期の彼の無地論の特徴を論じている。その上で、それぞれの時期、そして彼の生涯において、無地がどのような意味をもっていたのか確認している。 第一章では、本研究の主題を明らかにし、先行研究の状況について明らかにしている。それにより、柳宗悦の無地論については、一部の研究で言及はあるものの明確に主題化されてきておらず、深く論究されてこなかったことが確認されている。 第二章では、柳宗悦の『白樺』時代（一九一〇年―一九二三年）の無地をめぐる思索について考察している。前提として、当時の柳の神秘思想への傾倒や工芸への開眼について整理し、それを踏まえて、この時期に記されたと思われる彼の無地論を検討し、彼が無地を「単調」とは異なる「無限」を含んだ造形と理解していたこと、そこに座右の中国古陶磁という具体的な器物の鑑賞が深く影響していたことを指摘している。また、彼がそこに「無」という宗教的テーマを投影していたことも、あわせて指摘している。さらに、西田幾多郎の思想がそこに影響していた面について考察している。以上により、無地の造形という物質的な領域を通して宗教的な絶対性を感得していく、という柳の思索の独自性が浮かび上がる。 第三章では、柳宗悦が民藝運動を牽引していった一九二五年―一九四〇年代を中心に、彼の無地をめぐる思索を検討している。一九二〇年代・一九三〇年代・一九四〇年代それぞれに、彼が具体的にどのような造形を無地と呼び、それをどのような領域や産地の器物に見出し、それらについてどのような語りを見せていたか、詳細に論じている。これにより、柳が新旧の多様な領域・産地の器物の無地について継続的に観察や思索を行っていたこと、第二章で見た彼の最初期の無地論がより広い範囲の造形に応用されていったことが明らかになった。また、柳が多くの変種のある器物にも触れていたことに留意し、それらの中で、無地が「標準」「無地の心」といった鍵語と共に審美の基準の役割を果たしていたことも明らかになった。さらに、優れた文様が生まれづらい時代としての近代の中で、無地の造形が高次の「無難」の様相を示すもの、多くの作り手が立ち返るべき造形として、彼に位置付けられていたことも示された。 第四章では、柳宗悦が民藝運動に関する活動に区切りをつけ、「仏教美学」の形成に注力した、一九四八年―一九六一年（没年）までの彼の無地論について考察している。前提として、美醜の二元性の超越を説く「仏教美学」について確認し、それを踏まえて、当時の彼の無地論は、それ以前の無地論の延長線上にありながらも、作品の「素裸」の質感の美という点に力点が置かれるようになっていく面があり、特に「無地の美」としての陶磁器の窯変への注視が著しいものとなっていることが指摘された。そして、「仏教美学」の形成は、「美醜をこえた」造形としての窯変―無地の器物を欠かすことのできない参照項としながら進められていたこと、無地論は「仏教美学」を具体的に説明するある種の説法となっていたことが論じられた。また、「仏教美学」と連関するものとして柳が深めた「妙好」論と窯変―無地の造形の関係性を一考すると共に、窯変―無地と呼応する主題として柳が位置付けていた「疵」の問題についても論じられた。 第五章では、無地をめぐる柳の語りの中に確認される、「見る」―「見られる」の構造について論じている。まず前提として、柳が無地を偶発的な造形と見なし、「見られる」ことによって発生する存在であると考えていたことが示された。「見る」側の「受取り方」「誤読」によって、造形や言動が作者・行為者の想定していなかった美―利他となると柳は見、同時に、それを計画的に再現しようという作為を批判する。ここでは濱田庄司から柳が受けた示唆について考察し、特に濱田の原料
--

の扱い方、とりわけ塩釉の技法から、計画性と偶発性を止揚させることで新たな無地—美—利他が生まれ得るという希望を、柳が得ていたことが論じられた。また、こうした柳の見方が、作者・行為者の主体性への理解の欠如と捉えられ得るという点について論じ、この点と偶発の美—利他という問題が同時に存在しており、この併存のジレンマを含むものとして柳の無地論が位置づけられた。

第六章では以上の点を整理し、柳が見た無地は、多様な領域の器物の中に見出される造形であり、彼がそこに宗教的な主題を一貫して重ねて論じていたこと、彼が生涯無地に関心を持ち、その鑑賞を欠かすことのできない思想の基礎としていたことが明示された。

以上要するに、本論文の秀でた特徴は、柳宗悦の思想を「無地」という観点からとらえなおすことで、その思想の特質を明確にした点にある。柳が井戸茶碗や古丹波の灰被壺のような無紋の陶磁器を高く評価したのは、その「無地」の中に宗教的な「無心」を見出したためであり、その精神は、無作為の傷や汚れを造形美としてとらえる視点につながった。「用いる行為」と「仏教美学」は相即関係にあり、作家と使用者は美の共作者として林立するのである。

本論文は、美学や工芸史の分野だけでなく、宗教学においても学的貢献があると認められる。よって、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判断する。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。